

自然体験活動の中で見られる幼児のオノマトペの機能に関する一考察

— 観察事例による検討 —

近藤 綾・渡辺 大介・越中 康治¹

(2008年10月2日受理)

The Function of Preschool Children's Onomatopoeia Expression in a Natural Setting
—A consideration of case study—

Aya Kondo, Daisuke Watanabe, Koji Etchu¹

Abstract: Onomatopoeia expression is a sensitive word and an important language element of Japanese. But research on it, especially during preschool children, has not yet been sufficiently developed. This research investigates the function of preschool children's onomatopoeia expression, which is based on observations on their activities in a natural setting. The first purpose of this report is to mention two characteristics of onomatopoeia expression, namely expression variety and lexical ambiguity. The second purpose is to show the effectiveness of onomatopoeia expression in estimating their development of cognitive notice. The results of this case study indicate that: 1) Onomatopoeia expression greatly depends on the context or situation. 2) Onomatopoeia expression may become the key to understanding preschool children's development of cognitive notice. These two points will continue to be studied in future investigation.

Key words : Onomatopoeia, preschool children, natural setting

キーワード：オノマトペ、幼児、自然体験

はじめに

オノマトペとは、擬音語、擬声語、擬態語の総称である。具体的には、「ザーザー」「ニャーニャー」等のように実際の音を言語描写したもの(擬音語・擬声語)と、「ヌルヌル」「ドキドキ」等といった音を発しない生物や事物の動き・変化の状態・様子等を言語描写したもの(擬態語)を意味する。オノマトペは、五感に働きかけ、五感を使って印象を鮮明かつ簡潔に表現することを可能とする言語活動の一つと捉えられている(原子・奥野, 2007)。これまでのところオノマトペは、

言語研究の規範となる欧米においてオノマトペ自体が少ないことや、オノマトペが幼稚な言葉であること等の理由から、学問的にはあまり注目されてこなかった(田守・スコウラップ, 1999)。しかし、オノマトペが日本語の言語要素の中で重要な役割を担っていることが論じられて以来(早川, 1981; 葺阪, 1999)、近年では主に日本を中心として、日本語学領域や言語発達領域等で研究がなされつつある。とはいえ、オノマトペに関する知見はいまだ十分なものとはいえない。

近藤・渡辺・大田・伊藤・小津・越中(2008)は、保育場面における自然体験活動の中で幼児と保育者が使用するオノマトペの実態を把握する観察を行った。自然体験は、自然物や自然現象を五感で知覚し、その

¹ 山口大学教育学部

後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験である(山田, 1993)。そのため、五感を駆使した感覚的な言葉であるオノマトベ(原子・奥野, 2007)を捉えるにあたって有効な場であると考えられた。具体的には、まず、自然体験活動の中で表出された幼児(年長児, 年中児, 年少児)と保育者それぞれのオノマトベを、先行研究の五感による分類項目に従って分類した(福田・苧阪, 1992; 丹野, 2005)。そして、学年ごとの傾向を見出し、さらに興味深い事例をいくつか加えて実態を把握することを試みた。

その結果、近藤ら(2008)において確認されたオノマトベと事例からは、以下の3点の検討可能性が見出された。すなわち、①幼児のオノマトベの表出についての発達的な方向性の追究、②オノマトベから見られる、自然体験活動で培われる表現力の追究、③保育者によるオノマトベを用いた効果的な働きかけと受け入れの追究、である。このように近藤ら(2008)では主に幼児が日常の中で表出しているオノマトベの実態や、分類の傾向が先行研究と一致していることが確認された。そして、オノマトベに関する今後の検討可能性についての3つの提案が示された。しかし、幼児のオノマトベの実態を明らかにするためには、次の2点に関して事例からの記述を補う必要があると考えられる。

1点目は、オノマトベの特徴としてあげられる多様性(村井, 1970)や多義性(三上, 2004)を捉えて解釈を試みることである。ここでいう多様性は、一つの事象や動作に対して複数の表現を用いることができること(例えば、「トントン」と叩く」と「バシッ」と叩く)を指し、多義性は、一つの言葉が複数の意味を持つこと(例えば、「雷が「ゴロゴロ」鳴る」と「丸太が「ゴロゴロ」転がる)を指す。オノマトベの持つこれらの特徴は、分類等の量的側面からは把握することができない。

川口(2000)は、オノマトベが文脈の中で初めて真の意味を持つ表現であることから、会話文による文脈化の重要性を論じている。また、中里(2005)でも、オノマトベは直接的・感覚的な言葉であり、主観的な感覚を表現・伝達するため、話し言葉や会話に多く現われることが述べられている。よって、多様性や多義性を考慮してオノマトベの実態を把握する際には、会話文を中心とした事例からの記述が必要であると考えられる。

ここで、これまで子どもを対象に行われてきたオノマトベ研究について簡単に補足しておく。これまでのオノマトベ研究では、主に音韻分析や分類による言語発達としてのオノマトベ(滝浦, 1999; 丹野, 2005)についての検討がなされてきた。そのため、オノマト

ベだけを抽出し、発話状況を簡単に記した分析を行うことでオノマトベの様相を明らかにしているものがほとんどである。例えば、滝浦(1999)では、オノマトベと比喩との関連について言語発達の観点からの量的分析を行うことにより、オノマトベと比喩の出現順序を明らかにしている。また、丹野(2005)では、音韻分析を行い、言語習得の過程で重要と言われている育児語には畳語形態(語根を重ねて一語とした語:「ヒラヒラ」等)のオノマトベが多くみられることを報告している。つまり、これまでの子どもを対象としたオノマトベ研究では、事例を記述することによる文脈的解釈は行われていない。

以上のことから、本研究では、オノマトベの特徴としてあげられる多様性や多義性を捉え、より詳細に幼児の実態を把握するために、事例からの会話表現の記述を行う。すなわち、「誰が、誰に向かって、何のために」オノマトベを用いた表現を行っているのかについての解釈を試み、近藤ら(2008)の不足を補うこととする。

2点目としてあげられるのは、オノマトベを指標とした幼児の“知的な気づき”についての事例からの言及である。先に述べたこれまでの研究に加え、近年では、指導や評価の手がかりとしてのオノマトベの有効性についての言及(池田・戸北, 2005; 原子・奥野, 2007)もいくつかみられる。その中でも池田・戸北(2005)は、小学校低学年児における“知的な気づき”を見出す手がかりとして、オノマトベが有効であると報告している。ここでいう“知的な気づき”とは、子どもが自分なりに実経験を通して獲得した、実感を伴った気づきを意味する。つまり、オノマトベを指標とすることで、子どもの自然認識の認知の様相を確認できると考えられているのである。そして、池田・戸北(2005)は、この点に関する就学前児についての言及がないためその必要性を論じている。

幼児の“知的な気づき”をオノマトベから捉えるには、オノマトベのもつ感性(吉村・関口, 2006)等といった表現力の要素に注目する必要がある。よって、この点を捉えるには、オノマトベ表出時の前後の文脈が重要になると考えられる。以上のことから、本研究では自然体験活動場面で表出されるオノマトベの事例を取り上げて記述することで、幼児の“知的な気づき”を探り、指標としての有効性を明らかにする。つまり、幼児が表出するオノマトベを会話表現から捉えることで、幼児の外界の認識について明らかにする。その際、池田・戸北(2005)が自然認識において特に注目した触覚の重要性を交えて、幼児の“知的な気づき”について解釈を加えていく。なお、この点に関しては、

近藤ら(2008)の検討可能性②、すなわち、オノマトベから見られる自然体験活動で培われる表現力の追究、の中で一つの事例を紹介したが、本研究ではより詳細に考察する。

従って、本研究の目的は、観察されたオノマトベ事例を文脈的に記述し、近藤ら(2008)の実態調査をより詳細に把握し、幼児が表出するオノマトベの実態について明確化することである。具体的には、1) 多様性と多義性、2) 幼児の“知的な気づき”の2点について、観察によって得られた事例から抽出された幼児のオノマトベを、前後の文脈とともに記述し解釈を試みる。

方法

観察対象 広島大学附属幼稚園の年長児、年中児、年少児クラス(順に34、35、20名)の幼児と、それぞれのクラスの担任保育者(3名)。

観察期間と観察時間 観察は2007年4月18日から2007年7月18日までの間に週1回の割合で計12回行った。観察時間帯は、8時50分頃から10時10分頃までの約80分間であり、この時間は自然体験を主とした保育活動を行う時間であった。総観察時間は、1クラスおよそ16時間であった。

観察方法 自然体験活動の中で幼児及び保育者が発するオノマトベに焦点をあてて観察を行った。観察対象園における自然体験活動はクラス毎に日々異なるものであり、園の各所で様々な活動が行われていたが、観察にあたっては、クラス毎に保育者周辺で行われた活動を中心に記録を行った。観察によって得られる情報の正確性を考慮し、各クラスに2名もしくは3名の観察者を配した。各クラスの観察者のうち、1名はビデオ撮影による観察を行い、他の観察者は筆記による記録を行い、保育者及び保育者周辺の幼児がオノマトベを発した時間やその時の状況等について、できる限り細かく記録した。なお、音声を明瞭に録音するために、保育者にはワイヤレスマイクを装着してもらった。また、観察者は幼児と関わらないことを原則とし、幼児の遊びや会話に対して言語的・非言語的なフィードバックを与えないよう、記録者として周辺的な立場を維持するよう心がけた。

分析方法 観察した12回のビデオ記録と発話記録から、表出されたオノマトベ表現を記録におこし、幼児同士あるいは保育者と幼児が、オノマトベを使用してやりとりをしている会話表現の場面をクラスごとに選択した。なお、オノマトベ表出場面を抽出する際、オノマトベか否かを確認するために日本語オノマトベ辞典(小野, 2007)を参考とした。その後、選択した場

面の中でも特に幼児が表出したオノマトベの特徴が最も明確に表れていると筆者らが判断した場面を事例として提示することにした。具体的には、どのような状況で何を表現しているのかについての明確な場面を、前後の文脈とともに記述し、それらの特徴を考察した。

結果と考察

ここからは、幼児のオノマトベ表出が見られた会話場面の8事例を順に提示し、オノマトベの実態について解釈していく。まず、前半部分では、3つの事例を取り上げ、オノマトベの特徴である①多様性と②多義性について事例とともに考察する。そして、後半部分では、5つの事例を取り上げ、オノマトベを指標とした幼児の“知的な気づき”を、①視覚の表現、②触覚の表現、③状態の表現、の各視点から考察する。

1) オノマトベの特徴

まず、オノマトベの特徴の一つである多様性と多義性についての事例をとりあげて考察する。

①オノマトベの多様性について

【事例1】ダンゴムシの丸め方(年少児)

保育者：「あ、ダンゴムシ見つけた。ダンゴムシあそこ」

男児1：「ダンゴムシ？」と言いながら、自分の虫かごにダンゴムシを入れる。

保育者：「上手上手。ほら、おだんごになっちゃった」
〈男児1が虫かごを開けて、ダンゴムシを取り出し、自分の掌に乗せてみるが、すぐさまダンゴムシを保育者に手渡す〉

保育者：「どうしたこれ(虫かごに)入れるの?」

男児1：「ゴロンゴロンして」

保育者：「ゴロンゴロンはねー、こう自分でするんよ」と言い、ダンゴムシを持った手を左右に振る。「こうやってギューってしてあげたらゴロンゴロンしないんよ。ここ入れとってあげてごらん」と言っ虫かごに入れようとする。

男児1：「ゴロンゴロンしたいん」

保育者：「これね、こうして(虫かごに)入れとってあげて、ダンゴムシさんゴロンゴロンなりたいなーと思ったらなるよ」といって、ダンゴムシをかごに入れる。

男児1：かごの中を見つめ、「ゴロンゴロンならんじゃーん」

保育者：「先生もダンゴムシさんじゃないけんあーどうしてあげたらいいかな?」

男児1：再びダンゴムシを取り出し、「噛まれる・・・」と保育者に渡すが、すぐに自分の掌にダンゴムシを乗せ、眺める。

保育者：「(通りかかった男児2名に対して) ねーねーこれさ、ゴロンゴロンなりたいうっていうんだけどさ、どうしてあげたらいいと思う？」

男児2：「道のね、斜めになったのね、グルグルなる」

保育者：「T君(男児1)がさ、ダンゴムシがゴロンゴロンならんって怒るんだけどさー、これどうしてあげたらいいんかねー？」

男児3：「丸まらして、早くゴロゴロのほうがいいんじゃない？」

保育者：「早くー？」

男児1：「ゴロンゴロン・・・」

保育者：「早くこうしたらいいんじゃないって」と言いながら、虫かごを左右に揺らし、「あ、なるじゃん。ほら。いいアイデアだね！」と男児1に見せる。

〈男児1はかごを覗きながら、かごを揺らし続ける〉

【事例1】は、ダンゴムシに注目した男児1を中心に、保育者や周辺の園児との関わりの中で展開されたものである。事例では、ダンゴムシを丸ませたい男児1が“ゴロンゴロン”というオノマトベ表現を用いて自分の思いを表現している姿が見て取れる。ここで男児1が自発的に発したオノマトベは、自分の思いを伝える伝達の機能として表出されたと捉えられる。この点からは、中里(2005)や吉村・関口(2006)が述べている、主観的な感覚を他者に伝達するためのツールとしてのオノマトベの機能を確認できるだろう。

また、「ダンゴムシを“ゴロンゴロン”するためにはどうすればよいか」について保育者が周囲の男児らに意見を求めた際、男児らは“グルグル”や“ゴロゴロ”と微妙に変化させたオノマトベ表現を用いて説明している。この場面が、オノマトベの特徴の一つである多様性を表わす表現であると言える。なぜ、男児らは“ゴロンゴロン”ではなく“グルグル”や“ゴロゴロ”といった表現を用いたのだろうか。

“ゴロンゴロン”と比較して“グルグル”や“ゴロゴロ”という表現からは、微妙な速度の異なりをイメージすることができる。【事例1】の中で男児らは、ダンゴムシを丸くする手段として、虫かごを早く動かすことをあげていた。そして、そのことを伝える際にオノ

マトベを用いていた。このことから、男児らが速度の違いを表すためにそれぞれ別のオノマトベで表現したのだと解釈できるだろう。つまり、大人と同様に、幼児の使用するオノマトベも微妙なニュアンスを鮮明に知覚することを可能にしていると考えられる。また、“グルグル”や“ゴロゴロ”といった主観的な感覚から生じるオノマトベの多様性は、自身の感覚にぴったり一致する表現で思いを伝えることを可能とするオノマトベの特徴が明確に表れていると捉えることができるだろう。

②オノマトベの多義性について

【事例2】砂場でのままごと遊び(年少児)

保育者：水を含んで固まりかけた砂をスコップで取りながら、「Nちゃん(男児4)、チョコレートあるよ、ほら。プルプルチョコレート」と言い、男児4の近くに置く。

男児4：置かれた砂の塊を見て「グルグルチョコレート」と言い、自分でも砂を取る。

保育者：「グルグルチョコレートになったの？」

男児4：「グルグル、グルグル」と言いながら、砂を集め続ける。

【事例3】葉っぱで水遊び(年少児)

〈男児5がコップに水をいれ、ストローで息を吹きかけている〉

保育者：「何かを入れたら面白いと思うんだけど、ブクブク」

男児5：浮かべる物を探しに行き、「ね、これ入れればいいや。ね、見て？」と葉っぱを取ってくる。

保育者：「それ、水に入れてみる？」

〈男児5が葉っぱに水に入れ、ストローで息を吹きかけるが葉っぱはうまく回らない〉

保育者：「さっきのMちゃんみたいにうまくならんね。どこが違うんでしょーMちゃんと・・・、入れ物変えてみたら？Kちゃん(男児5)葉っぱをクルクルしたいんでしょ？」

男児5：「グルグルがいいー」

これら二つの事例では、どちらにおいても“グルグル”という同一のオノマトベが用いられているが、それぞれの幼児が“グルグル”を用いて表現した現象は同一ではないことがうかがえる。つまり、オノマトベの特徴の一つである多義性が読み取れると言える。すなわち、【事例2】の男児4が用いた“グルグル”は、

主に砂の状態を描写したオノマトベであるのに対し、【事例3】で男児5が発した“グルグル”は、主に動きを描写したオノマトベと捉えられるのである。

この事例で注目したい点は、2つの事例のどちらの場合においても、幼児がオノマトベを発する前に、保育者がオノマトベを発しているという点である。さらに、どちらの事例でも、幼児は保育者が発したオノマトベとは異なるオノマトベを発している。このことから、幼児の自己主張の表れとしてのオノマトベの様相がうかがえるのではないだろうか。すなわち、先の事例でも触れたように、自身の感覚に一致する言葉で自分の思いを主張できるツールとしてオノマトベが有効に機能していると捉えられるだろう。また、このようなオノマトベ表現が年少児期から確認できるということは、語彙獲得初期段階の幼児にとって、オノマトベは自分の思いを伝えるための重要な役割を果たしていると言えるだろう。

2) オノマトベに見られる“知的な気づき”

次に、幼児の“知的な気づき”の表れとして機能しているオノマトベについて視覚・触覚・状態の描写ごとにみていく。

①視覚の描写

【事例4】謎の虫の正体（年長児）

〈保育者と女児2名が裏山を散歩中〉

女児1：「ねーねーこれなーに？この虫？」

保育者：「ん？虫がいる？あ、ほんとだ虫がいるね。ちょうちょみたいだし、バッタみたいだし、何だろうねこれ。Kちゃん（女児2）知ってる？」

女児2：「どれ？」

保育者：「これ、この虫。ちょうちょみたいだしー、バッタみたいだしー、ほら、ピョーンって飛ぶ」

女児1：「これ、セミみたいなん」

保育者：「セミー？ほら、何だろう？」

女児2：「これ、卵産みよるんよ、どこか探すところを」

保育者：「卵産むとこ探してるん？」

女児2：「うん。一回捕まえたことある。ピョンピョン飛びながら探しよる。」

女児1：「何だろうねー」

保育者：「ナナフシ」

男児6：「ツンツン虫！」

保育者：「んーん、ナナフシよ」

男児7：「ナナフシだってー」

【事例4】は、女児らが謎の虫と遭遇した場面である。この事例からは、女児らがその虫の正体を知るために、虫の特徴を視覚的に捉え、説明したり思案したりする姿がうかがえる。その際、女児2はオノマトベを用いて特徴を表現している。つまり、この事例の中で表出されているオノマトベは、幼児が虫を詳しく観察した末に表出した、視覚的な気づき表現としてのオノマトベと捉えることができる。この事例は、池田・戸北（2005）が、子どもは初めて目の当たりにするものについて情報を把握するとき、視覚的な特徴に目を向けることが多いと述べている報告を反映している。

加えて、事例からは年長児ともなれば、会話を介した他者との相互作用が充実し、他者と情報を共有することで、様々な可能性を考えることが可能となることも読み取れるだろう。その中で、会話にみられる視覚的な特徴に目を向けたオノマトベ表現は、他者との視覚的感覚の共有を可能にし、謎の虫に対するお互いの理解を深め、虫の正体の解明方法を思案するための有効な手段の一つとして機能していると捉えられるのではないだろうか。

【事例5】は、男児が名前を知らない虫の特徴を視覚的に捉え、オノマトベを使用して表現している様子である。ナナフシは、木の枝のように細長く尖っている姿が特徴的な虫である。ゆえに、男児6がナナフシを“ツンツン虫”と命名することは、視覚的特徴を十分かつ正確に把握していると言える。同時に、この特徴の把握が、幼児の“知的な気づき”の深まりを表わしていると言えるだろう。言い換えれば、男児6による“ツンツン虫”の命名は、自らの経験的知識（尖っているもの）を、視覚的情報（虫の形状）にあてはめ、オノマトベで表現するという過程に起因していると考えられるだろう。

2つの事例からは、幼児が未知の事物を認識する初期段階において、オノマトベを用いる傾向があることを確認できた。また、未知の事物を説明あるいは命名する際には、まず視覚的な特徴に由来するオノマトベを用いて表現を導き出していると言えるだろう。

②触覚の表現

【事例5】ナナフシの名前（年長児）

〈子ども達が名前を知らない虫の入った虫かごの前で話をしている。そこに保育者が通りかかる〉

【事例6】ザリガニの脱皮（年中児）

〈池で飼っているザリガニが脱皮しているのを見つけた保育者と子ども達が、新しく脱皮したザ

リガニと大人のザリガニを交互に触りながら話している)

保育者：「まだ元気じゃない。フニヤフニヤ。触ってごらん」

〈触る子ども達。捕まえようとする子どももいる〉

保育者：「捕まえたら死んじゃうよ。柔らかい？
こっちと比べて。こっちは？硬い？」

男児8：「硬い」

保育者：「こっち触って。フニヤフニヤよ。まだ生まれたばかり」

〈別の子どもが様子を見に来る〉

男児9：「ザリガニあんまり突つくとほさまれるよー」

保育者：「脱皮したんよー。皮を脱いだんよ」

男児9：「骨になったん？」

保育者：「骨になったんじゃなくて新しい皮が下にあったみたい。触ってごらん柔らかいから」

〈恐る恐る触る男児9〉

男児9：「骨がない」

保育者：「骨がないでしょ？ほら、中身はこれなんよ」と言い、新しく脱皮したザリガニを渡す。

男児9：触りながら、「ツルツルー」

【事例7】いろいろな花を飾る（年長児）

〈飾るため花を物色中の保育者と女児2名〉

保育者：「ここにもあるよ」

女児3：「この花痛い？(触って)気持ちいいじゃん」

保育者：「痛そうだけど痛くないね」

女児4：「触らせて、それ」

女児3：「フワフワ。気持ちい」と言い、女児4に触らせる。

女児4：「フワフワ。貸して」と言い、改めて触りながら「フワフワー、痛くなーい」

触覚に関するオノマトベ表現は、池田・戸北（2005）が述べるように、自然認識の中での幼児の“知的な気づき”について言及するにあたって最も注目すべき表現である。あるいは、触覚で感じたことをオノマトベで表出することは、自然認識において特に重要なものかもしれない。【事例6】【事例7】からは、次のことが確認できる。すなわち、幼児は触って感じたことを、オノマトベ表現を中心に報告しているということである。ここで注目したいのは、“オノマトベ表現を中心に”という点である。

どちらの事例においても、幼児が対象に触った直後

に発する感触は、“ツルツル”や“フワフワ”といった触覚を表すオノマトベである。そしてこれらの表現は、会話文の一部として、あるいは補足としてオノマトベを用いているわけではないことがうかがえる。このことは、触覚により表出されたオノマトベは、オノマトベ表現がメインとなり、単独でも十分に“知的な気づき”を表現し得るものとして機能していることを意味すると言えるだろう。

池田・戸北（2005）では、触覚によるオノマトベの表出が、予想以上に少なかったことを報告している。しかし、本研究の事例からは、幼児期の自然体験活動において触覚を駆使して表出されたオノマトベは、幼児の“知的な気づき”を有効に捉える指標として特に重要であるといっても過言ではないだろう。加えて、触覚に関するオノマトベを幼児の“知的な気づき”の表れの指標とするならば、年齢の低い幼児の外界の認識を知ることが可能となるとも言えるだろう。

③状態の表現

【事例8】オオバコの勝負（年長児）

保育者：「はっけよーいのこった。強いでしょ。これ細いのにすごい強い。まだ切れないんよ。どんなのが強いんかね？」

女児5：「Kちゃんに聞いたら、こうやってギニョギニョして体が折れたら弱いってよ」

保育者：「そうなんだ。太いのがいいんだね」

—中略—

保育者：「太くても折れちゃうよ。細いほうがいいのかな？」

男児10：「あんまり太いとボキッとおれるんよ。中ぐらいがいいんよ」

—中略—

保育者：男児10がオオバコ以外の草で勝負し、勝つ。「こっち（男児10）の方が強いね」

男児10：「何でー？」

保育者：「何でだと思う？ちょっと触った感じ硬いもん。どう？こっち（保育者が持っているオオバコ）とどっちが固い？」

男児10：保育者の持っているオオバコを触り、「ユラユラする」

保育者：「でしょ。こっち（男児10が持っているオオバコじゃない草）は？」

男児10：「うわ。固い」

保育者：「でしょ？」

【事例8】は、状態の表現に関するオノマトベを描写したものである。年長児になると、興味のある対象

についての特徴をより具体的に認識し、表現しようとする姿勢が育まれていることがこの事例からはうかがえる。その中で、オノマトベは主観的感覚を最も反映し得る表現、すなわち幼児の“豊かな表現力”の表れとして捉えることができると言える。

女兒5や男児10は、オオバコの勝負を通して、どんな植物が強いのか、なぜ強いのかについて、思案を繰り広げている。そして、実際に事物に触れ、それを動かしたり、他と比較したりすることで植物の状態を把握し、オノマトベを用いて自身が得た感覚を鮮明に表現しようと努めている。言い換えれば、“ギニョギニョ”や“ユラユラ”といったオノマトベ表現は、オオバコについての幼児特有の独創的な表現であるとみなせるとともに、外界を認識し自分と他者との相互理解を求める伝達機能として、効果的な表現であるとも解釈できるだろう。

加えて、この事例は、自分のこれまでの経験的知識と新たな事実とを照合し、そこからオノマトベを用いた表現を行っているとも解釈できる。なぜなら、この事例では、保育者がオノマトベを全く使用していないからである。この事例の保育者は、幼児の興味・関心を引き出し、そこから生じた疑問に対してヒントを与えているにすぎない。そのような状況の中で幼児が発したオノマトベ表現は、幼児の“知的な気づき”の一面面であると同時に、“豊かな表現力”の表れとも言えるだろう。つまり、子どもの発達を探るための指標としても、オノマトベが十分に機能していることを示しているのではないだろうか。

なお、“ギニョギニョ”というオノマトベはオノマトベ辞典（小野，2007）には掲載されていない。しかし、この場面における女兒5は、オオバコに実際に動かしながらその柔らかさを保育者に伝える際に“ギニョギニョ”と発している。つまり、自らの主観的感覚を表現するために、“ギニョギニョ”と発しているため、これもオノマトベ表現であると捉えることができるだろう。文脈から“ギニョギニョ”はおそらくオノマトベ辞典（小野，2007）における“グニョグニョ”を変化させた表現であると推察される。このように、オノマトベは主観的感覚に合わせて、個性的・創作的に表出できる特徴を合わせ持つのであるが、このことがオノマトベの魅力的な部分であると同時に、分類や判断の曖昧さに繋がる部分でもあるのだろう。

総合考察

本研究では、オノマトベの特徴と指標としての有効性について、近藤ら（2008）の実態調査では十分に明

らかにならなかったオノマトベの実態を、観察事例をもとに考察することでより明確化することを目的とした。そして、得られた事例から、2つの視点におけるオノマトベの利用可能性を明らかにすることができた。

前半部分に記したオノマトベの特徴、すなわち多様性と多義性に関する事例による考察からは、中里（2005）等でこれまで報告されてきたように、オノマトベがその時々、あるいは個人によって多様に変化し得るものであることを確認できた。加えて、同一の事物を異なるオノマトベで表現すること、あるいは、同一のオノマトベでも状況によって用途・意味が異なるということが確認された。そして、これらからは、オノマトベが前後の文脈に大きく依存する性質を持っていることが明らかとなった。それゆえ、川口（2000）も指摘しているように、オノマトベを分類する際には、状況の文脈的な把握が最も重要であると言えるだろう。

本研究では、オノマトベが多様性や多義性といった性質を持つため研究材料として扱いにくいとされていた点について、事例を検討することで解釈が可能となることを示せたと言えるだろう。オノマトベには、多様性や多義性を伴うという一見抜いづらい特徴がある。しかし、それらを問題点として捉えるのではなく、その特徴を活かすことで、これまで理解できなかった事象の側面を明らかにすることができるようになるのではないだろうか。このような特徴を持つオノマトベ研究では、今後も事例からの文脈的記述による解釈も重要な役割を持つと考えられるだろう。

後半部分では、オノマトベを指標とした自然体験活動の中の幼児の“知的な気づき”について記述し、特に触覚情報を表現するにあたって、オノマトベ表現が有効な指標となることが示された。全体をまとめると以下のように解釈される。まず、幼児は未知なる対象と出会うとき、その対象についての視覚的特徴を把握し、オノマトベを交えた表現を用いて状態を描写する。次に、（もし安全であれば）実際にそれらに触って確かめ、その際、幼児は触れた瞬間に感じたことを、オノマトベを用いることで直感的に表現する。今回得られた事例から、この場合の表現はオノマトベが最も活躍する表現であると言えるだろう。そして、幼児は出会った事物の状態についてより詳しく把握することを試みるようになるが、この場合においても、オノマトベは状態を表現するのに非常に有効なようである。

このように、幼児が自然との関わりの中で新たに獲得した事実は、経験的知識として蓄えられ、成長するにつれて科学的思考へと発展していく過程の中で重要な役割を担うと考えられる。そして、そのような過程の中で発生するオノマトベは、その時々幼児の認識

を知るための有効な指標となると言えるだろう。同時に、このようなオノマトペは幼児の“豊かな表現力”を探る指標としても有効であると捉えられる。

新しい幼稚園教育要領（文部科学省、2008）の「表現」の領域においては‘感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする’という内容が記されている。この記述は、感覚的な言葉であるオノマトペと通ずる点があるといえる。従って、本研究のような事例からの記述を行うことは、保育者がオノマトペ表現を指標として、幼児の姿を把握する際にも有効であると考えられるだろう。

最後に、今後の課題を3点あげておく。1点目は、本研究において会話文脈から考察を行うにあたり、オノマトペ以外の表現も調査対象に組み込むことで、全体的な流れや意図の把握をより詳細に行うことができることが考えられた。よって、今後は比喩等との関連性についても吟味していくことが必要であると言えるだろう。2点目としては、本研究では、年齢による発達の視点から事例をまとめなかった。しかし、“豊かな表現力”の指標としてオノマトペを探るにあたって今後は、年齢とともに変化してゆくオノマトペについても把握する必要があると考えられる。3点目は、本研究の事例からは、保育者のオノマトペも観察され、保育者の働きかけに応じて、幼児がオノマトペを表出する場面も多々見られた。従って、今後は保育者の使用するオノマトペに焦点をあてた調査も行うことが必要であろう。

【付 記】

本研究にご協力くださいました広島大学附属幼稚園の先生方と園児の皆様に深く感謝いたします。

【引用文献】

福田香苗・荻阪直行.(1992). 擬音語・擬態語の認知(16)－K児の3歳6ヶ月時の観察記録より－*日本心理学会第56回大会発表論文集*, 814.
 原子はるみ・奥野正義.(2007). 保育活動におけるオ

ノマトペ表現の有効的機能に関する一考察. *北海道教育大学教育実践総合センター紀要*, 8, 167-174.
 早川勝広.(1981). 育児語と言語獲得. *言語生活*, 351, 50-56.
 池田仁人・戸北凱惟.(2005). 低学年児童の「気づき」の表現に関する研究－生活科におけるオノマトペの機能－. *理科教育学研究*, 45 (3), 1-9.
 川口義一.(2000). 「ナラ表現」の「文脈化」と「教材化」. *早稲田大学日本語研究教育センター紀要*, 13, 27-49.
 近藤 綾・渡辺大介・大田紀子・伊藤祥子・小津草太郎・越中康治.(2008). 保育における自然体験活動でのオノマトペ表現に関する実態調査. *幼年教育研究年報*, 30, 113-119.
 三上京子.(2004). 多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み－「ごろごろ」「ばたばた」を例として－. *小出記念日本語教育研究会論文集*, 12, 63-77.
 文部科学省.(2008). 幼稚園教育要領. 東京：フレーベル館.
 村井潤一.(1970). *言語機能の形成と発達*. 東京：風間書房.
 中里理子.(2005). 教科書教材に見るオノマトペ－特徴の整理とそれを踏まえた読解指導との関連を目指して－. *上越教育大学研究紀要*, 25 (1), 1-14.
 小野正弘(編).(2007). *擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典*. 東京：小学館.
 荻阪直行.(1999). 感性のことはを研究する－*擬音語・擬態語に読む心のありか*－. 東京：新曜社.
 滝浦真人.(1999). 幼児言語におけるオノマトペとメタファー－子どもはいかにして世界を表現するか－. *共立女子大研究叢書*, 17, 66-162.
 田守育啓・スコウラップ.(1999). *オノマトペ－形態と意味－*. 東京：くろしお出版.
 丹野眞智俊.(2005). オノマトペ《*擬音語・擬態語*》を考える. 京都：あいり出版.
 山田卓三.(1993). *生物学からみた子育て*. 東京：裳華房.
 吉村浩一・関口洋美.(2006). オノマトペで捉える逆さめがねの世界. *法政大学文学部紀要*, 54, 67-76.
 (主任指導教員 杉村伸一郎)